

令和5年2月27日

## 令和4年度 認定こども園大谷オアシス保育園学校関係者評価

今年度の学校関係者評価委員会は2月7日に開催された。評価に当たって、父母向け20項目のアンケート及び、教職員向け21項目のアンケートとその分析結果が園長より示された。また補足説明と委員からの質問に対する応答には教頭や主任も適宜参加した。

園の管理体制については、昨今の保育施設での事故や虐待等の社会状況を踏まえた詳細で慎重な議論が行われた。そしてその上で、今年度の重点目標である『主体的な遊び』『乳幼児期のメディアとの関りについて』をめぐると実践と教育成果の見取りや親への発信、さらに教師の研修などについて、説明と議論が交わされた。

この後、評価委員が相互に意見を交わしてまとめたものが以下の評価である。

### 評価項目Ⅰ 園の管理体制 『A<sup>-</sup>』

委員からの質問や関心は、その中心が全国で発生している痛ましく残念な事故をめぐってのものであった。特にこども園には年少未満児が在籍しており、子ども一人ひとりの安心・安全環境はことのほか重要であり、これらをめぐって評価委員から質問が重ねられた。これらについて園長からの応答は適切で、子どもたちの日々の安全・安心が守られていることが十分に理解できた。

評価委員は親への質問項目3, 4, 5, 14にも注目し、親にも安心と満足が届けられていることを理解した。

また、教職員へのアンケート項目3~15において、園のセキュリティ体制や保育者としての災害時対応、災害時対応に関する親への案内、親との連絡手段、園内危険個所の点検と管理等の項目において見直しが必要であるという自己評価も相当数あった。

しかし同様の質問項目に対する親からの評価は、保育者自身による評価より高いものであり、委員からは謙虚に自省する保育者集団を高く評価する声も出ていた。

これらの項目の教師自身による評価には一部、低いものも見られるが、親からの評価および委員の聞き取りによる評価も踏まえると、園による自己評価「B」とは言えず「A<sup>-</sup>（エーマイナス）」と判定する。

## 評価項目Ⅱ 主体的な遊び 『A+』

オアシス保育園から認定こども園オアシス保育園となっても、長く歴史を重ねてきた大谷第二幼稚園の保育の伝統は引き継がれている。共に在る大谷第二幼稚園と共有する保育感は保育者に確かな保育の方向性を示し、日々の保育への自信と誇りを与えるものとなっていることが園長の説明から伺えるところである。

自然体験重視の保育・教育活動は五感の豊かな育ちを育み、子どもたちの豊かな育ち合いを引き出し、小学校入学までに多様な興味・関心・意欲を引き出すことに結び付いている。このことはすでに卒園した子どもと今、在籍する子どもの親でもある委員のコメントや HP の写真などからも知ることができる。親へのアンケート項目の 3, 4, 5, 9~14 から、当園の教育への深い信頼が読み取れる。特に「主体的な遊び」に関する項目については 100% の親が「十分できている」「ほぼできている」と回答しており、評価委員においても高く評価するものである。また委員会では主体的な遊びが「協働性」と共にあることなども議論され、今年度の実践も園児の主体的な遊びを引き出し、「人格の基本」や「学びに向かう力」を育むものになっていたと理解した。

親への質問項目の 14「園の活動で子どもが生き生きしていると感じる場面はありますか」という質問で 34 名、総ての親が「十分にある」と応えていることは感嘆に値する。

以上の点から、本項目の評価は『A+ (エープラス)』である。

## 評価項目Ⅲ 乳幼児期と保護者のメディアとの関わり 『A』

今回の調査からは各家庭における「子育てとメディアの関わり」の実態理解、そして「メディアとわが子の関わりについてはルールを作るなど慎重な親が多い」という「認定こども園大谷オアシス保育園在園児の家庭とメディア」に関する理解を深める結果を得るものとなった。

Society5.0 が謳われ、小学校教育においても一人一台のタブレット端末が提供されている。加速度的に情報環境が変化する時代に、だからこそ、大人たちが必死になって守らなければならないのが「ひとの基本育て」「ひとの幼児期にしか育たない力の育成」であろう。

「私たちの生活とメディアは切り離せないものになっていくが、本園の教育活動において必要かどうかはこれからも慎重に模索し検討していきたい」という園長の言葉に肯定的にうなずきながら、当評価委員会のかつて父母だった委員や現在父母である委員は、子どもたちには自然体験や遊びを通して「人間社会の基本であるコミュニケーション能力」その基本を育ててもらいたいという願いも述べておられたことを付記する。

評価項目Ⅲについては「各家庭におけるメディア利用の実態理解」と、調査と関連して当園の「メディアと幼児教育」への向き合い方、主張を再確認し、今後も時代に流されずに子

ども達の「人としての基本育て」に向き合い続けてもらいたいとの願いも込めて『A』とする。

## 総合評価 『A』

危機管理について、教職員の自己評価が低いことについてその理由や原因を丁寧に明らかにし、例えば親への伝え方について園では園長、教頭からのみ伝えるのではなく折々にすべての保育者から伝えることなどを検討しており、改善が期待できる。これらの点から、次年度の当該項目の改善と自己評価向上を期待したい。

「主体的な遊び」は当園の伝統を受け継ぐ特色で、子どもたちに寄り添い、笑顔を忘れず汗をかくことを厭わない教師集団と子どもたちとの楽しい生活をさらに期待し、親にも安心・と支援を届ける園として今後の発展をさらに期待したい。

今年度の評価について、コロナの影響が消えないなか、工夫と努力を重ねた教職員と園全体に、評価委員会は総合評価『A』を与える。

評価委員会 委員長 平野 良明  
委員 廣田 和久  
委員 向 航平  
委員 上新 佳代子

## 追記)

最後に、委員の一人が参加する俳句の会、会員の投稿句を紹介したい。  
鑑賞文は委員によるものである。

### 《 遠足のしんがりの子に手を貸して 》

私は、今でも幼稚園に関わっているのであるが、その会議の中で、ある幼稚園では、保護者のお迎えの待機時間にビデオを見せて大人しく待つようにしているとのこと。幼稚園は、本来人間の持つ五感を自然の中で刺激して成長を促す場所だと思う。その中から、ものの良し悪し、対人関係を育てていくものだと思う。遠足で、少し歩くのが遅くなった友達に手を差し伸べる子供はきっと思いやりのある大人になっていくことだろう。